

# 保育現場における親支援とカウンセリングアプローチ —親育ちセミナーで実施した構成的グループエンカウンターの効果—

富田 久枝（児童学科・准教授）

## Parents Support and Counseling Approach on Child Care Site —Effect of Structural Group Encounter Executed in Seminar that Brings up Parents for Child-Care Support —

Tomita, Hisae

### Abstract

The falling birthrate is a serious problem in Japan. “Child-nurturing support” was a measure advanced by the government for dealing with the falling birthrate. Parents’ consultation and seminars are conducted on the site of the child care. The purpose of this study is to examine the effect of this counseling approach termed the “Structural group encounter” method.

In general, parents who showed low level communication showed more improvement at the end of the program than those that did not participate in the “Structural group encounter” method.

**Key words :** child care site, child-nurturing support, seminar for parents, Structural group encounter, counseling approach

**キーワード :** 保育現場、子育て支援、親へのセミナー、  
構成的グループエンカウンター、カウンセリングアプローチ

### 1. 問題と目的

近年、核家族化、少子化、母親の社会進出といった家族のあり方や女性のライフスタイルの変化に伴い、「子育て」のあり方も大きく変化してきている。その結果、保育所待機児童の増加といった問題をはじめとして、子育てに関わる様々な問題が深刻化している。その最も顕著な問題として「子育て不安」や「虐待」があげられるが、これらは子育てにとって危機的な状況をもたらすものとして危惧されている。

このような現状を少しでも緩和すべく、近年、

保育所や幼稚園では「子育て」を支援するといった取り組みが積極的に行われるようになってきた。

そこで、本研究では、まず子育て支援全般のこれまでの現状について整理し、さらに、保育現場における子育て支援の課題について検討するなかで本研究の問題と目的を明らかにしていきたい。

#### （1）子育て支援のこれまでの流れと現状

子育て支援は平成6年（1994）に厚生労働省から出された「エンゼルプラン」からはじまる。当時は、「少子化対策としての子育て支援、保育サービスの拡大、仕事と子育ての両立を支援する」が

中心課題であった。この中心課題を実現するために基本的視点「①安心して出産・育児のできる環境整備、②育児支援のための社会的な協力体制をつくる、③子どもの利益を最大限に尊重した上で、育児と仕事の両立支援、家庭での育児支援、育児のための住宅及び生活環境の整備、ゆとりある教育の実現、育児コストの削減」を示した。しかし、育児の負担感の軽減、少子化を食い止めるなどの顕著な成果はみられなかった。

そこで、このエンゼルプランの理念を継続するために平成11年（1999）「新エンゼルプラン」を策定、中心課題として「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について」が掲げられた。この新エンゼルプランの重点課題はエンゼルプランをさらに具現化するために「①固定的な性別役割分業や職場優先の考え方を見直す、②仕事と子育ての両立のための雇用環境の整備、③安心して子どもを産み、ゆとりをもって育てるための家庭や地域の環境作り、④多様な受容に対応した保育サービス、⑤子どもが夢をもってのびのびと育つ教育と地域の環境作り、⑥公共施設の座席、トイレ、段座について、子ども・障害者・妊産婦等が使いやすい住宅の普及」であった。

さらに、新エンゼルプランの理念を継続すべく、平成16年（2004）に「子ども・子育て応援プラン」がスタートした。この施策は平成17年度から5年間を期間とし、少子化の流れを変えるための4つの重点課題を掲げている。重点課題は「①若者の自立とたくましい子どもの育ち、②仕事と家庭の両立支援、③生命の大切さ、家庭の役割等、④子育ての新たな支えあいと連携」とされている。

以上のように、少子化対策としてスタートしたエンゼルプランも時代のニーズの中で、子育て環境の整備中心だった内容から、子育てをする母親の、そして父親の生き方の創造を目指すものへと大きく変化していった。

## （2）保育現場（幼稚園や保育所）における子育て支援

①幼稚園教育要領・保育所保育指針改訂との関連  
平成に年号が変わり、保育所保育指針および幼稚園教育要領といった日本における保育の指針は

2度の改訂を行い、平成20年に3度目の改訂・告示が行われ平成21年度実施に至った。改訂を重ねる度に「子育て」を支援する内容が増え、地域の子育ての拠点となるためのいろいろな取り組みが示されている。

具体的に幼稚園教育要領を例に挙げると第3章 指導計画および教育課程に係る教育時間終了後等に行う教育活動などの留意事項の第1-1一般的な留意事項では「（8）幼稚園における生活が家庭や地域社会との連続性……後略」等、地域、家庭、生活といった側面での援助が求められている。また、第2-2では子育て支援を取り上げ「相談に応じる」「交流の機会を作る」「施設を開放する」といった地域における幼児期の教育センターとしての役割を強調している。また、保育所保育指針では第6章 3地域における子育て支援という独立した項を設けその重要性を強調している。以上のようにエンゼルプランの変遷と連動するように、保育現場においても子育て支援の一翼を担うことがこれまで以上に期待されることになった。

## ②保育現場における保護者支援に関する課題

保育現場に子育て支援が期待される一方で、筆者は巡回相談を通して保育現場では保護者とのコミュニケーションの難しさが最も大きな課題であることを感じている。

吉川（2008）は幼稚園教員を対象に日常の保育の中で保育者が抱える困難感の調査を実施した。それによると、保護者との関係作りが27%と最も多い課題としてあげられ、その困難の内容は「コミュニケーション」「協力、連携」「感情交流や気持ちの理解」「子育て観の理解」などであった。また、金谷（2008）は保育現場における気になる保護者支援の課題や要望を保育者対象に調査し、問題を抱える保護者が増加しているという回答は保育所で97%であり、全員の保育者が保護者への支援に不安感を抱いていることが分かった。さらに金谷（2008）はどのような解決方法があるかも質問しているがその結果「保育参加日に参加してもらう」「懇談会で問題を話し合う」など実際的な方法や「保護者懇談会を増やす」「保護者向け

講演会を増やす」「保育カウンセラーに相談の  
てもらおう」などの今後の方策があげられていた。

一方、栗原（2008）は「子育て勉強会」を幼稚園で運営するといったアプローチの効果を検証している。それによると、保護者のコミュニケーションと成長を促進するねらいで、カウンセリング研修を年4回、午前中1時間半、4年間継続して勉強会を運営した結果、「閉塞的な子育てから開放された」「長い時間軸で子育てを捉えることで見通しがついた」「自分の子育てに客観的視点を持ち子どもとの距離がおけた」「子育てをする自分の自己肯定感が高まった」といった感想が得られている。

以上のことから、保育現場で子育て支援を推進するためにも、保護者とのコミュニケーションを促進し、より良い関係を築くことが、支援を有効にするためにも必須であり、相談をする、講演会を開くといった行事の見直しもさることながら、保育者と保護者とのより良い関係作りのためのアプローチも有効であると考えられる。

### （3）本研究の目的

前述のように、子育て支援を保育現場で担うことが期待されてはいるが、優先課題として、保育者の保護者とのコミュニケーションに課題があることが分かった。一方、エンゼルプランの変遷からも子育ての価値観の創造といった子育て中の親の内面を育てる方向性が示され、従来の子育て相談や園開放では十分ではないことが推察できる。栗原（2008）の研究結果のように、カウンセリングアプローチは今後、必要になってくるのではないだろうか。そこで本研究では保育現場における子育て支援「親育ちセミナー」における構成的グループエンカウンター（カウンセリング技法）の活用可能性や効果を模索することを目的とする。具体的には、親育ちセミナーの参加者のリレーション形成や自己理解の変化からその効果を検討することを目的とする。

## 2. 方法

（1）対象：A区A市の公立（10園）私立（2園）保育園のセミナー参加者延べ42名

参加者は主に、A区の保育園が行っている子育て広場（園開放）に参加している保護者と在園児の保護者、近隣の民生児童委員等、顔見知りではあるがほとんど会話をしたことが無いといった関係の参加者が中心である。

（2）期間：平成20年6月～平成21年3月（10ヶ月）：全12園を実施した期間

### （3）方法

①「親育ち応援セミナー」（A市A区と協働）を保育現場で開催。

セミナーは全12箇所の保育園で1回ずつ開催された。参加者の募集はA区の広報や保育園のお知らせなどにより周知した。セミナーの運営主体は保育園であり、セミナーの中心的内容として構成的グループエンカウンターを実施した。セミナーの講師（構成的グループエンカウンターのリーダー）はA区の依頼を受けた筆者が担当した。

### ②質問紙によるアンケート調査

セミナー参加者に質問紙（アンケート）をセミナー開始前・後に実施して効果を測定する。質問紙は本セミナーを協働で開催したA市A区と研究者（筆者）とで作成した。セミナー開始前に記入の質問紙は参加者の年齢等のプロフィール、子育て支援講座の参加経験、親育ち応援セミナー開始前の人的・物的な子育て環境および子育て相談等に関する心理面についての項目で構成されている。セミナー終了後に記入の質問紙はセミナー参加後の人とのコミュニケーション、自己への気づき、ストレスの状態、構成的グループエンカウンターのエクササイズに関する感想等の項目で構成されている。

### （4）セミナーの主な内容

#### ①全体的な流れと主な内容

開始10：00～終了12：00（アンケート記入も含む）

20分：親子のコミュニケーションに関するレクチャー

100分：構成的グループエンカウンター（演習）

#### ②構成的グループエンカウンター（structured group encounter）とは

構成的グループエンカウンターとは、國分康孝氏がアメリカ留学時に学んだグループアプローチを1970年代に帰国後、日本の大学生対象に実施し

たのがはじまりである。

片野（2007）は構成的グループエンカウターの源流は、アメリカのエスリン研究所で行っていたオープンエンカウンター（open encounter）という演習などを取り入れたグループアプローチにあると説明している。

構成的グループエンカウターのねらいは、「ふれあい体験」と「自他理解」である。その基本原理は「ホンネの原理」「構成の原理」「グループの機能」である。また、構成的グループエンカウターは主にインストラクション（導入・説明）、デモンストレーション（見本の呈示）、エクササイズ（練習課題）、シェアリング（分かち合い）、介入（指導、助言）といった構成で進められるのが基本となっている。

#### （5）今回実施したエクササイズ

今回のセミナーで実施したエクササイズは Table 1 に示した通りである。地域の保護者対象でセミナー運営者（筆者）とは初対面という点から、リレーション作りからねらいを持っているエクササイズを中心に選び、軽いものから負荷の有るものへと流れを配慮した。

1. いろいろ握手	6. 二者択一
2. バースディーライン	7. 新聞紙の使い道
3. 質問じゃんけん	8. 私は私が好きです。なぜならば・・・
4. 他社紹介	9. 私は人と違います。なぜならば・・・
5. 自己紹介チェーン	10. 私は私の子どもが好きです。なぜならば・・・

### 3. 結果および考察

（1）親育ち応援セミナーの参加に関するまとめ

#### ①参加者の構成

親育ち応援セミナーの実施保育園は12園であったが、開催園によって10名以上集まる保育園もあれば、5～6名程度しか集まらない保育園もあった。このように参加者にばらつきがあったため園別の分析が不可能と考え、全参加者42名を分析対象とした。参加者の年齢については Figure 1 に、参加者の子どもの年齢については Figure 2 に、参加者の内訳は Figure 3 に示してある。それによると、参加者は地域の民生児童委員やベテラン保育者を除いて30代前半の母親が最も多く30%で、

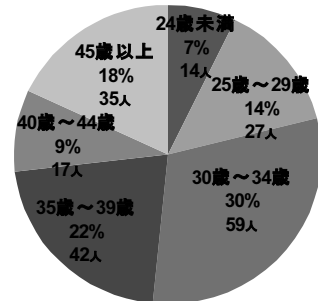


Figure 1 参加者の年齢階層

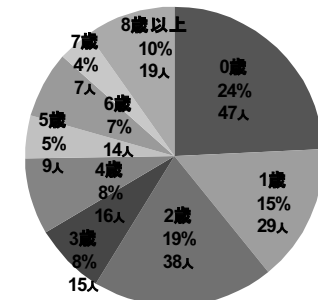


Figure 2 参加者の子どもの年齢

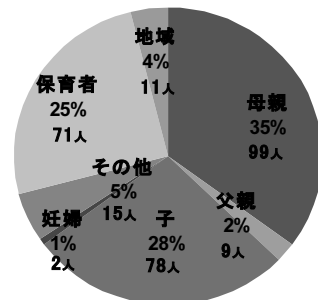


Figure 3 参加者内訳

30代後半が22%、20代が14%と20代から30代の乳幼児を抱えている母親がほとんどで、少数ではあるが父親の参加もあった。参加者の子どもの年齢も、0歳が24%、2歳が20%、1歳が15%と子どもの年齢が低い傾向であった。

#### ②子育て支援事業への参加傾向

これまでの他の子育て支援事業の参加傾向については Figure 4 に示してあるが、ほぼ全員の母親が何かしらの子育て支援事業に参加しており「あかちゃん教室」といった子育ての初歩的な知識や技術を習得するような事業参加が31%で最も多く、「地域サロン」といった地域の事業にも参

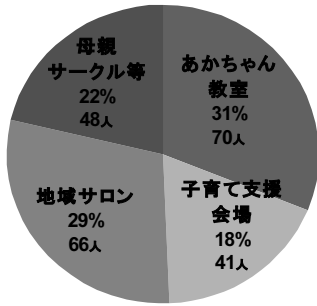


Figure 4 親子で参加できる会の参加経路  
 (※複数回答可)

加しており子育てに積極的な関心や意欲を持っている母親の参加が多かったとも考えられる。

### ③セミナー開始前の参加者の状態

セミナー開始前の15分間で質問紙の記入をお願いした。その結果が Figure 5 に示してある。「友達、仲間はいですか」といった質問では69%が「はい」と回答している。「相談できていますか」という質問では「はい」36%、「少しはできている」が31%と半数以上の参加者は相談ができていた。次に、「気持ちが話せていますか」という質問では「相談できていますか」の質問と対応するように「はい」が36%、「少しはできている」が33%とほぼ同じであった。「よその子にも話ができますか」の質問では「はい」が19%で「少しはできている」が49%と最も多く、余りよその子どもには話しかけない傾向があることから、他の親との関係もあまり密ではない傾向が推測できる。それと対応するように「年代の違う方との交流がありますか」の質問でも「はい」が29%、「少し

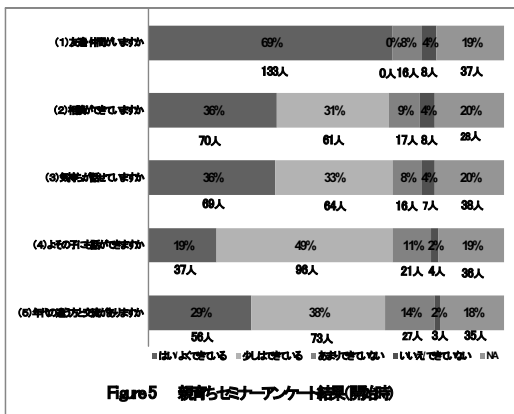


Figure 5 親育ちセミナーアンケート結果(開始前)

はできている」38%と子育ての人的環境の範囲があまり広がらないことが推測できる。

### ④セミナー終了時の参加者の状態

セミナー参加後15分間の質問紙の記入をお願いした。その結果が Figure 6 に示してある。「セミナーは期待どおりでしたか」の質問では「期待どおりだった」が76%、「ほぼ期待どおりだった」が23%と参加者のほとんどがセミナーへの満足感を抱いていた。「気持ちを話すことができましたか」の質問では、「良く話せた」が77%、「少しは話せた」が28%で、気持ちを話す点では開始前の数値が大幅に変化した。「分かち合い気づきはありましたか」という質問でも「気づきがあった」が52%、「少しは気づきがあった」が44%で、これもほぼ全員が仲間との交流で気持ちや行動を分かち合えたと感じていた。これらの結果からセミナーは参加者のコミュニケーションを促進する可能性が示唆された。

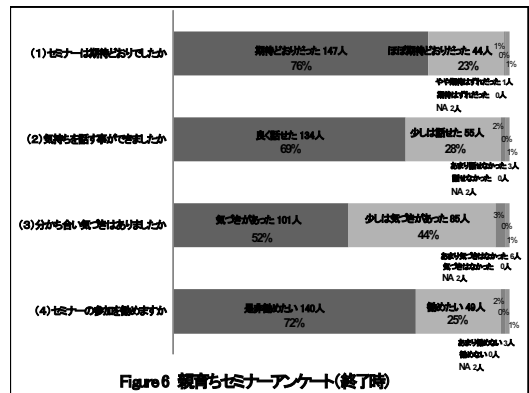


Figure 6 親育ちセミナーアンケート(終了時)

### (2) 構成的グループエンカウンターの内容に関するまとめ

セミナーの中心的な内容が構成的グループエンカウンターなので、このアプローチについて参加者がどのように捉え、意義を感じているのかについても調査した。その結果が Figure 7 に示してある。ただし、質問(1)(2)は自由記述のため今回は分析の対象としなかった。さらに、構成的グループエンカウンターのエクササイズ(演習課題)の種類による好悪についても尋ね、その結果が Table 2、3 に示してある。

### ①構成的グループエンカウンターによるふれあい

## 体験について

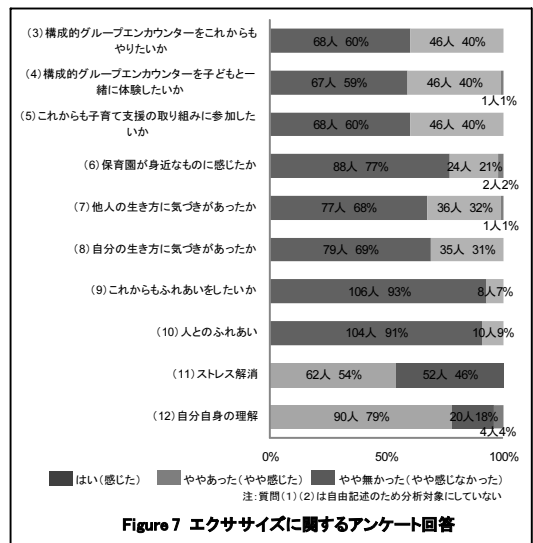
構成的グループエンカウターのねらいである「ふれあい体験」について確認の質問を行った。その結果、「人とのふれあいが良かった」という記述が91%とほとんどの参加者がふれあい体験をよい体験として受け止めており、「これからもふれあいたいですか」といった質問でも93%の参加者が「はい」と回答しており、ふれあい体験の促進効果が認められた。ただし、この結果はセミナー終了時のもので、どこまでこの体験による気持ちが持続するかは検討されていない。

## ②構成的グループエンカウターによる自他理解について

構成的グループエンカウターのもう一つのねらいである「自他理解」が促進されたか確認する質問も行った。その結果、「自分の生き方に気づきはありましたか」という質問では69%が「はい」、31%が「やや気づけた」と回答している。このことから自分の生き方への気づきを促進する可能性が示唆されたと言える。しかし、「自分自身について理解できましたか」という質問では「はい」が18%で「ややできた」と回答した参加者は79%で自己への気づきよりは数値が低かった。たった1回のセミナーで自己理解まで促進できるということはかえって危険であり、やや理解できた群が多かったことが一般的な結果であろう。また、「他人の生き方に気づきはありましたか」という質問では68%が「はい」で「やや気づけた」は32%であった。自己への気づきとほとんど同じ結果であり、構成的グループエンカウターのようなグループアプローチは相互のコミュニケーションからその気づきを引き出し、自他が一緒に意識される傾向を持つのかもしれない。

## ③構成的グループエンカウターについての感想

構成的グループエンカウターを体験しての感想で「はい」と回答を得た質問を比較すると「これからもふれあいをしたいか」が93%、「人とのふれあいは良かったですか」では91%ほとんどの人がふれあいについて高く評価していた。しかし、構成的グループエンカウターをこれからもやりたいかという質問では「はい」が60%、「やや感



エクササイズの名称	良かった人数(人)	割合(%)
私は私の子どもが好きです	21	30%
質問じゃんけん	14	18%
私は私が好きです	13	17%
いろいろ握手	7	9%
パスディーライン	6	8%
自己紹介チェーン	6	8%
二者択一	3	4%
新聞紙の使い道	3	4%
私は人と違います	1	1%
他者紹介	1	1%
計	75	100%

エクササイズの名称	嫌いな人数(人)	割合(%)
私は私が好きです	15	26%
新聞紙の使い道	12	20%
他者紹介	7	12%
質問じゃんけん	6	10%
握手	5	8%
自己紹介チェーン	5	8%
パスディーライン	4	7%
アウチ	2	3%
二者択一	2	3%
私は人と違います	2	3%
計	60	100%

じた」40%で、子どもと一緒に体験したいかという質問でも「はい」が59%、「やや感じた」が40%とほぼ同じような結果であった。これは、このようなアプローチを初めて体験した参加者がほとんどであったため、人とのふれあいなどへの関心の高まりに比べるとこのアプローチに対する積極的な体験意欲にまでは至らなかったのかもしれない

いが初めてということを考えれば評価に値すると考える。

#### ④保育園における子育て支援事業についての感想

「保育園が身近なものに感じたか」という質問に77%の参加者が「はい」と回答し21%の参加者が「ややそう思う」と回答しており、保育所といった地域密着の施設が少しでも身近に感じることができたということは、地域における保育所での子育て支援事業の役割を少しは遂行ができたものと考えられる。

#### ⑤構成的グループエンカウターのエクササイズに関する感想

構成的グループエンカウターのエクササイズに対する好悪をエクササイズ別に質問した。まず、「良かったエクササイズ」であるが、「私は私の子どもが好きです」という自分の子どもの良さを人前で自己主張するエクササイズが30%で最も多かった。親にとりわが子のことがやはり一番、重要な話題なのであろう。次いで「質問ジャンケン」というペアを組みジャンケンの勝ち負けでプロフィールを聴き合うというエクササイズで18%あった。ジャンケンという方法が適度に退行を促し、開始直後の緊張を解す効果があったのかもしれない。その次が「私は私が好きです。なぜならば」という自己への気づきを促すエクササイズで17%の参加者が良かったと評価していた。「自分自身を振り返ることがほとんど無かったので」などこれまでの体験としてほとんど無かったと言う点で新鮮さや意義を感じ「良かった」と感じたようである。次に「嫌だったエクササイズ」であるが、前述の良かったエクササイズと矛盾するように「私は私が好きです。なぜならば」という自己への気づきを促すエクササイズが26%と最も多く、これは、自分を積極的に出せるタイプと急には自分を出せないといったタイプとでは正反対の感想を持ってしまうのかもしれない。この結果から、このエクササイズを今後実施していくときには、言えない、参加したくないといった気持ちをリーダーは十分配慮する必要があることが改めて確認できた。

## 4. 本研究のまとめ

### (1) 新しい子育て支援の方法としての構成的グループエンカウターの可能性

子育て支援では親対象のセミナーが保育園だけではなく児童館、公民館などいろいろな場所で実施されており、内容も様々である。今回のセミナーでは初めて構成的グループエンカウンターというカウンセリングの技法をコミュニケーション作りの方法として取り入れた。その結果、親同士そして保育者等との主体的なコミュニケーションを促進することができ、今後の新しい親教育アプローチとしての可能性が今回の研究では確認できたと考える。

### (2) 構成的グループエンカウターのエクササイズの特徴と配慮

小学校以上の学校においては、この構成的グループエンカウンターは学級経営や生活科、道徳等の教科のなかでも活用され、子ども達の関係作り、コミュニケーションの促進や子ども自身の心の教育として注目されてきた。今回は親を対象に実施したが、使ったエクササイズは小学生でも使える初歩的なものを使用した。しかし、大人であってもエクササイズへの好き・嫌いがあり、その特徴として普通という感想より、同じエクササイズでもとても良かったという人と、嫌だったという人がおり、両極の感想を抱く傾向があった。この結果から、構成的グループエンカウンターはその人のこれまでの人生観や価値観といった内面的な部分に関わる可能性があるため、個々の心の動きに十分留意しながらグループワークを進めることの重要性が示唆された。

## 引用文献

- 片野智治 2007『構成的グループエンカウンター研究』図書文化社 44-49.
- 金谷京子 2008「保育者が気になる保護者とその支援」『日本保育学会第60回大会発表論文集』595.
- 栗原ひとみ 2008「幼稚園による「子育て勉強会」のデザインについての一考察—親としての成長と勉強会の役割—」『日本保育学会第60回大会発表論文集』243.

富田久枝 2008 保育に活かすカウンセリング—子育て支援とSGE—『日本保育学会第60回大会発表論文集』271.

富田久枝 2009 「親育ちセミナーにおける構成的グループエンカウンターの効果—子育て支援における活用の可能性—」『日本カウンセリング学会第42回大会発表論文集』154.

吉川はる奈 2008 「保護者が「保護者との関係作り」において抱える困難と課題」『日本保育学会第60回大会発表論文集』369.

## 要旨

現在、日本は少子化という重大な課題を抱えている。そこで、政府はその対策として「子育て支援」を推進してきた。このような中で、保育現場においてもその一翼を担い、親対象の相談やセミナーを実施している。そこで、本研究は親対象のセミナーに構成的グループエンカウンターというカウンセリングアプローチにより、親のコミュニケーション促進を図り、その効果を明らかにする。その結果、セミナー開始時はコミュニケーションレベルが低かった親が、セミナー終了時にはコミュニケーションレベルが高くなる傾向が見られた。

(2009.10.22 受稿)